HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	人文・社会科学系大学院生の業績動向に関する一考察
Author(s)	飯塚, 理恵; 澤田, 真理子; 森岡, 和子 他
Description	RA協議会第10回年次大会 ： まるっとダイバーシティ～多様性の知から異なるバックグラウンドの力をけん引するURAとは～. 2024年10月16日(水)-10月17日(木). 主催：リサーチ・アドミニストレーション協議会. 沖縄科学技術大学院大学. 沖縄
Issue Date	2024-10-16
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93931
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc/4.0/
Type	conference poster
File Information	P58_RA10th2024.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

RA協議会第10回年次大会 2024年10月

P58 人文・社会科学系大学院生の業績動向に関する一考察

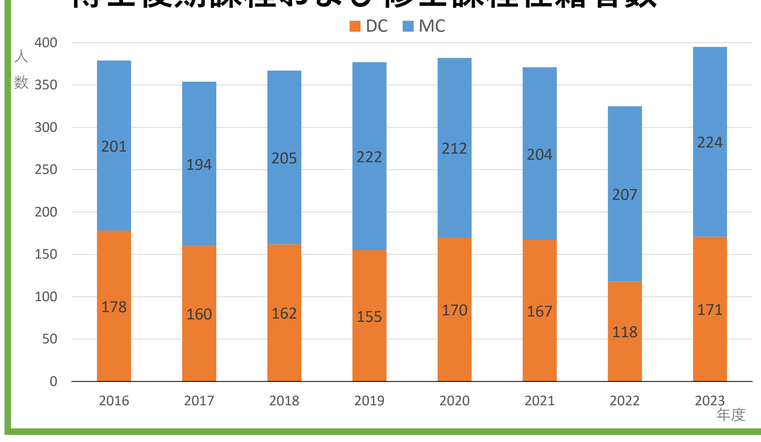
北海道大学大学院文学研究院研究推進室　○飯塚理恵 澤田真理子 森岡和子 加藤美樹

北海道大学文学研究院では、**大学院生を若手研究者と位置づけ**、2016年度より毎年1回、修士課程・博士後期課程に在籍する全大学院生約400名を対象に業績調査を実施している。論文や学会発表のみならず、翻訳・執筆活動・作品制作・展示といった**人社系ならではの多彩な研究成果**についても集約分析している。本発表では、業績数の推移を報告するとともに、**大学院生への経済支援**や、**コロナ禍**のような環境要因が業績数の多寡に影響するのかについても考察を試みる。

1. 調査概要

目的： 業績動向の把握、現状に即した大学院生支援の改善案立案
頻度： 毎年1回
対象： 博士後期課程DC・修士課程MC在籍者、 休学者含む修了生（大学院在籍時の成果、若干名）
項目： 論文、学会、その他（アウトリーチ、展示、出版等）
方法： Google Form

博士後期課程および修士課程在籍者数



専攻・研究室名

人文学専攻（16研究室）
哲学倫理学、宗教学インド哲学、日本史学、東洋史学、西洋史学、考古学、文化人類学、芸術学、博物館学、欧米文学、日本古典文化論、中国文化論、映像・現代文化論、言語科学、スラブ・ユーラシア学、アイヌ・先住民学

人間科学専攻（4研究室）
心理学、行動科学、社会学、地域科学

調査の流れ

2月
- 教授会にて研究院長より調査実施のアナウンス
- 大学院生に学内システムで一斉通知（月末回答締切）

3月
- 記載不備の個別確認
- 回答を研究室ごとのExcel ファイルにまとめる
- Google Driveで教員に共有し、記載内容確認依頼

4月
- 全体の集計作業
- 回収率96.7％（2023年度）
- 執行部に情報共有し、今後の支援策について検討

5月
- 文学研究院ポータルサイトの「文学研究院Factbook」に集計結果を掲載し、部局内教職員に情報公開

調査用 Google Form画面

実施のポイント

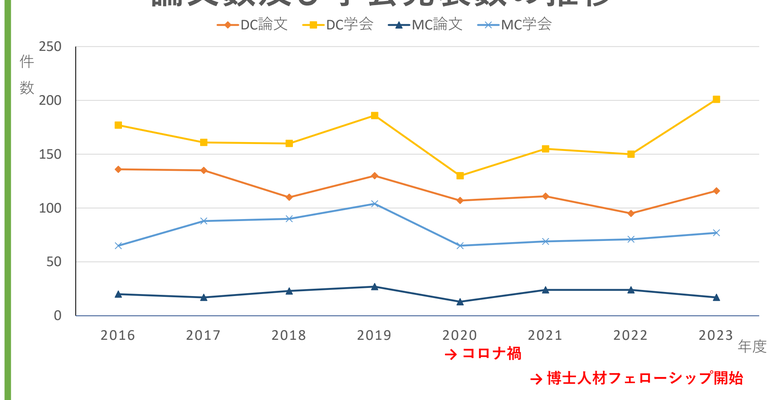
教授会でのアナウンス
研究院としての取り組みであることを周知することで、回答率アップと有用なデータの長期蓄積が可能となる

データクレンジング
院生回答の情報整理を行ってから教員への内容確認を依頼することで、教員の負担軽減と調査の精度向上を図る

データ活用
受賞情報等を広報誌、ウェブサイト、SNSに掲載することで、大学院生の呼び込みを図り、優秀な人材輩出の好循環を生み出す

2. 業績数の推移

論文数及び学会発表数の推移

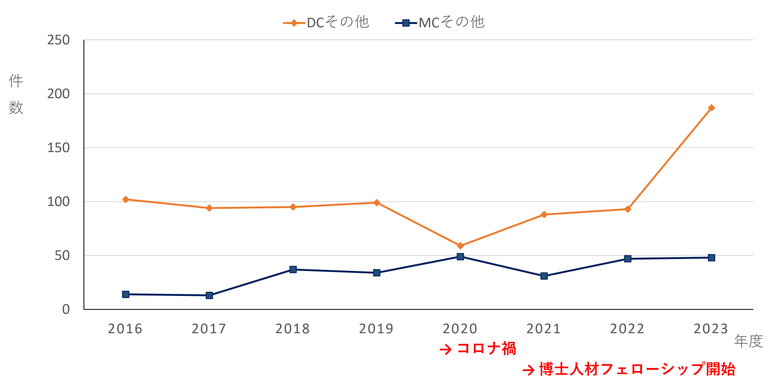


コロナ禍による業績数への影響
- 2020年度は前年度比でDC論文18％減、DC学会30％減、MC論文48％減、MC学会38％減
- 登校回数の減少、調査の延期・中止による研究の遅延、学会中止による発表機会の喪失が要因であると推測
- 研究室別では、2019年度より2020年度の論文業績数増の研究室も複数あり

コロナ禍以降の業績数
- 2023年度はMC論文を除く3項目でコロナ禍以前並みに業績回復
- 2023年度DC学会増加の要因は、突出して業績数の多い院生の存在による

2021年度開始博士人材フェローシップとの関連
- 全DC生の一人あたりの業績数平均を100とした場合のフェローシップ生の一人当たりの業績数平均
  【論文】2021年度：115　2022年度：83　2023年度：131
  【発表】2021年度：162　2022年度：98　2023年度：139

その他業績の推移



コロナ禍による業績数への影響
- 2020年度は前年度比でDCその他40％減、MCその他40％増
- 2020年度MCその他増加の要因は突出して業績数の多い院生の存在による

コロナ禍以降の業績数
- 2023年度DCその他増加の要因は突出して業績数の多いの院生の存在による

2021年度開始博士人材フェローシップとの関連
- 全DC生の一人あたりの業績数平均を100とした場合のフェローシップ生の一人当たりの業績数平均
  【その他】2021年度：115　2022年度：83　2023年度：131

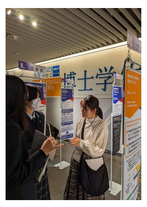
論文・学会・その他業績数増加要因

業績数の多い特定の院生の存在により研究活動が活性化し、所属研究室の業績数が向上するというケースが複数存在する。博士人材フェローシップ採択者の業績数の平均は2022年度を除き、全DC生平均より多い。

「その他」業績

人文社会科学系領域では、書籍出版、論壇誌への投稿、外国語書籍の翻訳、芸術作品制作、メディア出演、出前授業、研究成果の展示等、あらゆる「場」において研究成果の発表が可能である。近年、研究成果のアウトリーチや社会還元が重視される中、人文社会科学領域の「研究知」を社会に接続し、新たな価値を創造する経路の開拓は今後ますます重要になるだろう。

「その他」業績の例



【アウトリーチ】札幌駅前地下歩行空間「チ・カ・ホ」にて一般来場者への研究紹介

【展示】北大文学部「書香の森」にて企画展示

【作品制作】新北海道美術協会展にて新人賞を受賞（切絵）

【出版】「書香の森」企画展示から生まれた書籍

【出版】指導教員と大学院生による共著　小林秀雄賞受賞

【ファシリテーター】北大人文学カフェにて、専門性を活かしてトークのファシリテーションを担当

上記以外にも、コラム執筆、クラウドファンディング、翻訳賞受賞、メディア出演など多様な成果あり

3. 業績向上に資する取組

大学院生の業績向上を後押しするため文学研究院では各種支援制度を設けている。

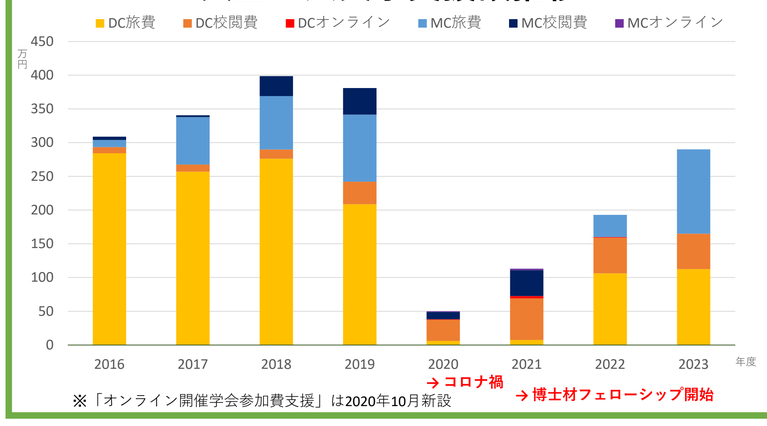
名称	支援対象	支援金額
共生の人文学 旅費支援	学会発表・調査時の交通費	上限20万円
共生の人文学 オンライン開催学会参加費支援	オンライン開催学会参加費	実費
共生の人文学 校閲費支援	外国語校閲費	上限10万円
院生図書	研究用書籍購入費	1人1万4千円程度
EXEXフェローシップ※ （DX、アンビシャスも同様の支援額）	生活費、研究費	生活費月額18万円 研究費年額40万円+α

※ JST次世代研究者挑戦的研究プログラム2021～2023年度に北海道大学で実施されたDX博士人材フェローシップおよびアンビシャス博士人材フェローシップの統合版として2024年度に開始。

博士人材フェローシップ受給者数

	2021	2022	2023	2024
DX	34	42	37	
アンビシャス	3	6	10	
EXEX				58

共生の人文学支援額推移



※「オンライン開催学会参加費支援」は2020年10月新設

「共生の人文学」

文学院生の経済支援の柱。本制度を活用して業績を積み重ね、アカデミアへの就職を果たした修了生多数。文学研究院独自の制度として実施しているため、状況に応じて柔軟な運用が可能。コロナ禍によりオンラインで開催される学会が増加したため、2020年10月に「オンライン開催学会参加費支援」を新設。

● 参加可能なセミナー等
◆ 経済支援となるもの

大学院生業績調査対象

学士課程
- ●若手研究者支援セミナー
- ●学振説明会
- ●大学院進学説明会

早期の大学院進学動機付け

修士課程
- ●若手研究者支援セミナー
- ●学振説明会・書き方相談会
- ●若手研究者ML登録
- ◆共生の人文学
- ◆院生図書
- ◆TA
- ◆学内外助成金

若手研究者としてキャリア開始

博士後期課程
- ●若手研究者支援セミナー
- ●学振説明会、書き方相談会
- ●若手研究者ML登録
- ◆共生の人文学
- ◆院生図書
- ◆TA、 RA、TF
- ◆学内フェローシップ
- ◆学振特別研究員DC1・DC2
- ◆学内外助成金

若手研究者としてキャリア深化

アカデミア・ノンアカデミアで活躍

まとめ　業績向上のためには、早い段階から若手研究者としての自覚を持ち、業績を積み重ねていくことが重要。URAは業績動向を分析し、充実した研究支援体制の整備に取り組む。自組織の「強み」を知り、戦略的広報活動によって学生を呼び込み、優秀な人材輩出に結び付けられる良い循環を生み出す仕組みづくりを担う。

Faculty of Humanities and Human Sciences, Hokkaido University
letura@let.hokudai.ac.jp